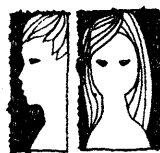


# 子どもの絵とシンボル(一)



秋山達子

さと

子どもの絵は象徴的であるとよくいわれます。たとえば熊の一族の絵を描いても、それは動物園の檻の中にいる大きな恐ろしい熊ではなくて、その子どもの心の中にある家族のイメージを熊を使って表現したものであったり、また楽しい気分をあらわすのに、木の葉が笑っているところやお花が向かい合ってお話をしている絵を描いたりします。

つまり子どもの絵は寓意的で動物や植物やその他いろいろのものの姿を借りて感情を表現する手段であることが多く、絵というよりもお話なのです。また自由奔放な筆使いで前向きと横向きの姿が同一紙面に描かれていたりして、ピカソの絵でも見ているように思える時もあります。しかし子どもは、いつもそして誰でもこのように大胆な絵を描くわけではありません。画用紙

の隅に小さくしか描けない子どももありますし、また自分で色彩を限定してしまつて、一色か二色しか使わない子どももあります。

以前アメリカの子どもの絵で黒人が集まつて住んでいる地区で描かれたものを見る機会がありました。ほとんど木や草などが見られない都会の一隅に住む子どもたちの描いたものであったのにもかかわらず、どの絵にもよく木が描かれていました。しかしその木はTの字のように上にのびないような形のもが多く、また絵の中の人物も手や足がなかったり、目や口がなかったり、極端な例では首から上がまったく欠けているものもありました。これらの成長しない木や顔のない人の絵は抑圧されている周囲の環境を反映しているものでしょうけれども、それでもものびようとする子どもたちのたくましい成長力が、そのあたりではあまり見られないはずの木によってあらわされているように思えて印象的でした。

基底線の上に一列にお花が並んで上の一

隅に太陽が描かれている絵は、五、六歳の子どもにの絵によく見られる画一的なものです。時には女の人が水をやっていたりいつも太陽がなくて雨が降っていたりするものもあり、花にはそれぞれ名前があったりします。このようにどれも同じような観念的な太陽と花の絵でもやはりそれを繰り返して描く子どもたちの刻々に変化する成長力とその過程の表現であり、また一つ一つの花はその子どもの分身であって、それぞれ異なる機能や性質をあらわしているようです。また細かく観察すると少しずつ情景が変化していたり、色の使い方が違っていたり、新しいものが加わったりしていて、その時の気分や成長期の変化の多い子どもの個性を示しているようです。

一見あまり意味を持たないような幼稚園児の自由画も、このようによく観察すると、それぞれの個性を持って成長をつづけている子どもの心理過程がよくあらわれています。たとえば水の中で泳いでいるお魚ばかり描いている男の子がいます。また火

をふく山を描く女の子がいます。ところがこのお魚ちゃんと火山ちゃんは大変仲が良くてお魚ちゃんは火山ちゃんが傍にいないと、すっかり元気がなくなってしまうのです。またある雨の日には、いつも右上に太陽を描いている子どもが珍しく左上に描きました。そしたら左上に太陽を描いていた子どもは、反対に右上に描いていました。

子どもたちの絵はこのようにその子どもの個性や成長過程によって異なり、簡単に色彩や図式のシンボルによって解釈するわけにはいきませんが、一人一人の子どもの絵を注意して見えますとその日の天候の違いさえも微妙に表現されていて、その時の心理の変化が目に見えます。子どもの絵は幾何学的な図型からはじまって次第に線がしっかり描けるようになり、色彩による肉づけがされて発展していくものですが、そこに表現されるものの主題や構図の変化を象徴的に理解すると、さらに細かい個性的な成長過程の変化を観察できるように思えます。

次にあげる事例は都内のある幼稚園に通っている四歳になる男の子の一年の間に描かれた絵による成長の過程を追って考えてみたのですが、幼稚園の先生をしてもらえる唐島綾子、仲田光江、久保島昭子、黒沢洋子の諸先生方と東大の学生相談所の近藤邦夫氏、その他の方々のご協力による研究の結果です。私たちはできるだけ多くの可能な解釈を試みてみましたが、人間の知恵や意識的な努力では、無意識の産物であるような象徴的な表現のほんの一部分しか捉えることができないものであり、私たちの研究もただその一面を捉えただけで、これらの絵にはまだまだ多くの意味が含まれているように思われます。皆さんも絵を見ながら何か思いつかれたこと、感じられたことがありますら、ぜひ教えていただきたいと思います。

B君は四歳になって幼稚園に入るようになりました。ただ、幼稚園の先生にとっては少々困る子どもでした。椅子にしっかりとすわっていることができなくて、軟体動

物のようにすぐくにかくにやとなつてしまひ、言葉もはつきりしないで大声で叫んでいても何をいつているのかよくわかりません。視点が定まらないで落着きがなく、すぐ部屋からとびだしていなくなつてしまいます。そして暗い部屋の隅やお手洗いに隠れてしまつたり、廊下にひっくり返つて、足をばたばたさせながら大声で叫んだりします。

それで入園するのに少し問題もあつたのですが、二つ年上のおねえさんも同じ幼稚園であつたし、母親も大変熱心なので、ともかく入園が許可になりました。母親の話によると、家にお年寄りがいらして姉の方はすつかり甘やかしてしまつたように思つたので、B君は男の子だし、少しきつくしようと離れに静かに寝かせたままで、人を近づけないようにしてあまり大事に保護をしたので、かえつて成長が遅れてしまつたようです、ということでした。

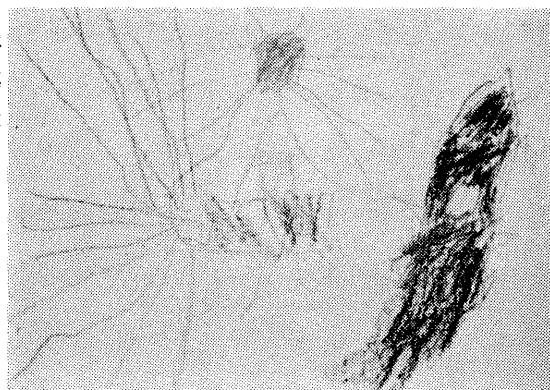
そんなわけで最初の二ヵ月は他の子ども  
の邪魔にならないようにと、遠足にも皆と

いっしょには行かずに直接現地に母親が連れていつたり、五月人形の飾りをかきまわしてしまふB君をしつかり押えてひきとめたりして、母親が幼稚園に残つて、つききりで世話をされました。入園して一月もすると今まで親にはあまり甘えなかつたB君も、先生に抱っこしてもらふことが大好きとなり、音のするものに興味を示したりするようになりましたが、遊びは、砂場に水をまいたり、その上に転がつてどろんこになつたりすることが多く、先生方や母親が気を配つていたのにもかかわらず、お節句の日に配られた柏もちを二つも、そのままあつという間に呑みこんでしまつて、皆をはらはらさせました。この頃に描かれた絵が次にあげる三枚です。

一番最初のものは右側に茶色と緑色でなにかごしゃごしゃとした固まりがあり、真中にうすい緑色で自動車描かれています。左側にライトがついて、黒い弱々しい線で画面の左側を照らしています。そしてこれも長く細い光線のある赤い太陽が上に

描かれています(写真(一)参照)。

この構図を箱庭療法と同じように右側が外の世界をあらわし、左側が内の世界をあらわすものとして考えてみますと、B君はそれまでの隔離された一人だけの静かな生活から離れて幼稚園に通いだしたので、外の世界にも何かがあるということが、おぼろ気になつてきたところではないかと思

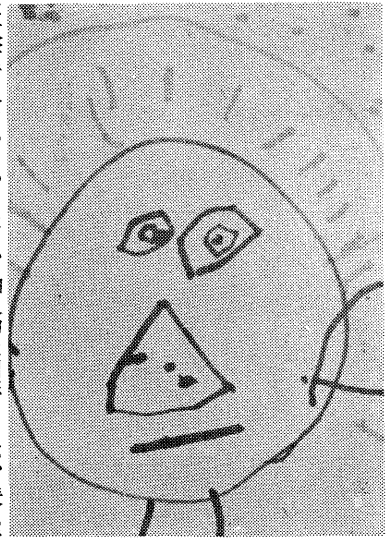


写真(一)

います。でもそれはなんだかごしゃごしゃした気持ちの悪いもので、自動車は心の内側に向かって逃げだしかけているのかもしれない。どちらにしろ自動車のライトは、左に向かっていて、まだ外の世界を照らそうとはしていません。そしてこのように内と外とに二つにわかれてきた世界を結ぶように、太陽が真中の上部に描かれています。光線が弱々しくてちょっと心細い感じです。

その次のものは「母の日」に描かれたおあさんの絵です。これはボール・ペンを使ったもので、しっかりと大胆に描かれています。円形や三角でできている幾何学的なおあさんです。大きな耳と角ばった目がついていますが、向かって左の目が三重丸になっています。なんだか目をひかせて耳をすませてB君の行動に注意している母親の姿が目に見えようです。(写真(二)参照)

幾何学的な図形はこの年齢の子どもの絵にはよく見られます。特に自閉的な子ども



写真(二)

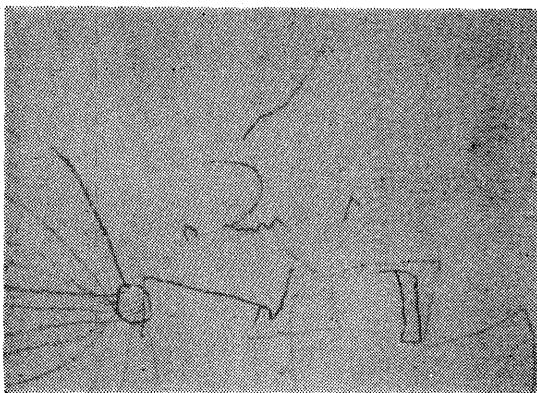
ンで描かれた弱々しい自動車ですが、やはり左側にライトがついています。上にも何か描きかけましたが、はつきりした形にはなっていません(写真(三)参照)。

二番目と三番目の絵はオレンジ、黄色、ピンクなどの暖色で描かれています。が、暖色であるから暖かい気持ちをあらわしたものの、というように簡単には片づけられないようです。ただ暖色を使った場合と寒色を使った場合とは、あきらかに気分や態度の違いが見られるようで、B君の場合は、外の世界や他人を意識して、小さくおとなしくなっている時によく寒色が使われているようです。

この頃からは左側に強調点がおかれているものが多いようです。三番目の絵はクレヨ

この頃から先生にもB君のようすがわかってきましたので、母親のお供もおことわりしてB君は一人で幼稚園に残って皆と遊ぶようになります。おべんとうが始まってお昼は皆といっしょに食べますが、B君は

写真 (三)



食べるのがとても早くて、お隣りの子の食べものにも手を出したり、下に落したもので口に入れかかるので、先生の監督もなかなか大変です。そのうちに少しずつ自分のものと他人のものとの区別がわかるようになって、これは誰々ちゃんのね、と欲しそうな顔をしながらも、何回も念を押してからあきらめるようになりました。

また抑揚のついた不思議な言葉ですが、少しわけのわかるお話もできるようになりました。

この頃一番よく使った言葉は、「だめっていって」と節をつけていうことで、母親の手をはなれて、あまりだめといってくる人がいないので、もの足りなかったのかもしれない。この頃から夏休みの少し前までにまた三枚の絵が描かれました。

一つは、画面の左よりに描かれた女の人が大きき手を広げて通せんぼしているみたいな絵です(写真(四)参照)。

母親がいつも手でいたずらをしないようにB君を押えていたので、その印象が残っているのかもしれませんが。過保護の子どもの絵にはよく大きな手をした母親が描かれています。しかしこれは母親ばかり責めるわけにはいきません。過保護の両親と成長の遅れがちな子どもとの関係は悪循環になってしまつて、どうしても他の子どもより遅れがちなので、母親がよい面倒を見ることになり、そうすると子どもは成長がと

まっています遅れてしまう結果となります。B君の場合も先生には少し手がかつて大変でしたが母親の監督の下から離れて、結果としてはよかつたように思われます。絵の左手の下に何かよくわからないようなものが描かれていますが、これは動物か乗物か、そんな形をしたB君自身が、母親の手の下から左の方に向かって逃げだし



写真 (四)

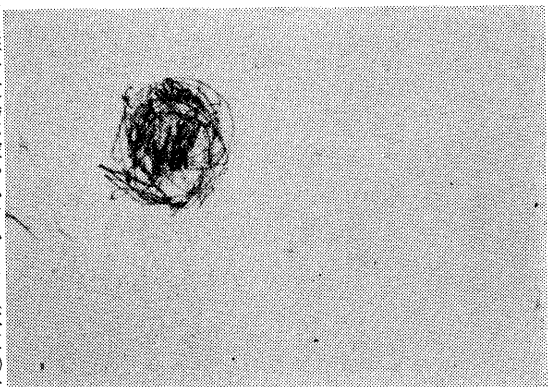
ているようにも見えます。

その次の絵は「父の日」の頃のものでおとうさんの絵ですが、これはしっかりと描かれたおかあさんの絵に比べて大変弱々しく、おとうさんの絵なのといわれたいとなんだかわかりません。茶色のおだんごのようなものに薄い青で目のようなものがついています。右手にも白で何か描かれていますが形になっていません(写真(四)参照)。

いそがしくてあまりお家で見ることもない父親の印象は、B君にとってはこんなものなのかもしれません、それにしても悲しい感じの絵です。これは父親というよりもまだはっきり形もつかず、手足もなく目もしっかりしない、母親像と未分化のB君自身の自画像のようにも思えます。

その次に描かれたものはボール・ペンを使っているせいか、大変しっかりとした自動車ですが、不思議なことに自動車のライトが両方についています。左向きライトは黒、右向きのものは赤で光線が描かれていて、自動車の上には三角形の頂点をなすよ

#### 写真(五)

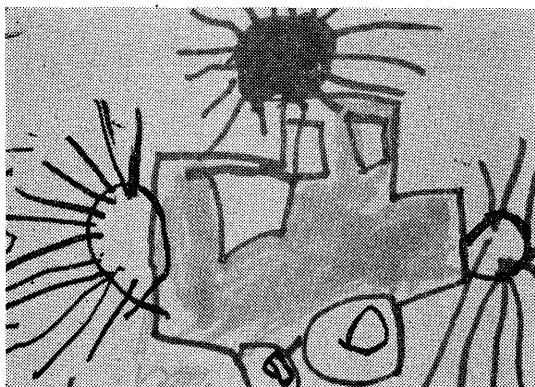


うな形で太陽が輝やいています(写真(六)参照)。

今まで自分の存在を中心に、心の内ばかり向かっていたB君の注意や関心が外の世界も照らし始めたようです。そして幼稚園でのお友だちとの生活にも慣れて、他人の存在が意識されだした頃と思われます。そして内と外と二つの方向にわかれた気持ち

を統一するように三番目の光りであるお母さまが頭上に輝やきだしたようです。子ども達の絵の中で自動車が右に向いたり左に向いたりしていることには大きな意味があるようですが、右利きの人には左向きの顔や車の方が描きやすいので、絵を描きはじめる頃は特に理由もなく左向きのものが多いようです。また右向きの自動車が描かれて

#### 写真(六)



いたので、先生がこれはこっち（右向き）に走っているの、ときいてみたら、「ううん、バックしているところなのよ」という返事もありましたから、ただ方向のことだけで深い心の動きに関連づけて考えることは無理のようです。それでもB君の場合にはライトがついていますし、その光りの方向によって心の内側や外側を照らしていると考えてもよいように思われます。

夏休みに近くなって、お友だちという他人の存在を意識しはじめた故か、B君は静かになって、もう床に転がって大声で泣き叫んだりすることもなくなりました。絵もしっかりしているし知能の程度もむしろ標準より高いように思われましたが、遊びは他の子どもに比べてずっと幼なく、言葉による表現がほとんどできないので直接行動で示すことが多く、やはりまだ手のかかる子どもでした。

夏休み前の絵は色調が変わって青と緑の寒色を使ったもので、海の波のような線で上下にわけられた上部の右手には、手を広

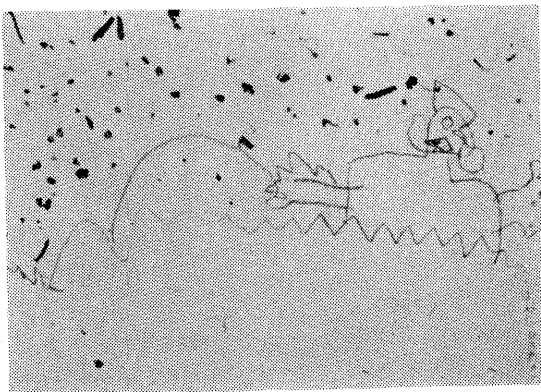
げた母親像のお化けのような姿と、中央に丸いものが描かれています。横線から上部には黒い点々が打たれていて、夏なのに雪でも降っているような感じですが、横線から下には何も描かれていません（写真(七)参照）。

中央の丸い小山のようなものは、海の下の無意識の中から盛り上がってきたB君の成長力のような感じがしますが、右手のお化けみたいな姿はそれを指しているのか、あるいは押えようとしているのかよくわかりませんが、なんだか盛り上がってくる成長力と対照的に、今までそれを押えていた母親像のようなものが沈んでいくところのようにも思えます。

また夏休みの後にすぐ描かれたものは、お休みの間の虫採りの絵ですが、大きな目玉をしたとんぼのおかあさんのようなものが、広げた手の下に飛んでいるとんぼの子か虫のようなものを虫籠に入れようとしているところ（写真(八)参照）。

このような絵は母親像が自由に飛んでい

写真（七）



る成長力のようなエネルギーを籠の中に閉じこめようとしている否定的なものか、あるいは反対にエネルギーを取り込もうとしている肯定的なものか、どちらにも考えられますが、いずれにしろこのような母親像はB君の母親を直接意味しているものではなく、B君の心の中にあって、B君の成長を助けたり、また阻んだりする母親的なも

のイメージであり、このように母親像はいつも肯定と否定の両方の意味を持っています。そしてこのような絵を描き空想をし、お伽話や絵本の中に同じような主題を見出しながら、母親との未分化の世界から独立して行く心理過程はどの子どもも成長期にも見られるものですが、B君の場合はこのあたりから現実面でも母親の手から少しずつ離れて社会の一員として自分を築きあげていきます。そしてこの後は、絵の中

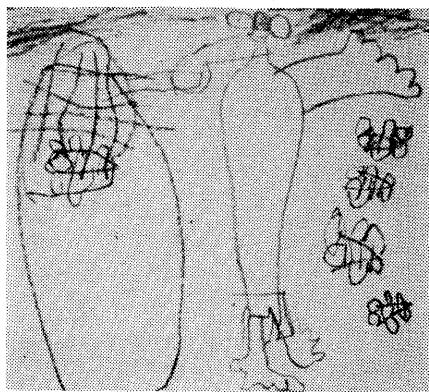


写真 (八)

にも手を広げた母親のような姿は見られなくなります。

秋の運動会の時は、B君が団体行動とされるかどうかと母親が心配して、休ませようと考えておられたようですが、雨で一週間日延べになったその間に、先生のすすめもあってB君は、結局、運動会にも参加することになりました。そしてとても運動会が楽しかったようで次のような絵が描かれました。画面は球入れの競技の最中で右側には赤い太陽の下で赤い玉がたくさん籠の中に入っているところが描いてあります。左側では足もすっかりしていないし手もない困った顔をした人みたいなものが、それでも白玉を籠に入れようとがんばっています。中央には二重の丸があります(写真(九)参照)。

B君はこの時は、白組でそこら中はしゃいぎまわっていて、実際には一つも困った顔はしていなかったそうですが、どうもこの手のない人はB君自身のように思われます。母親像の絵がいつも大きな手を広げて

いたのに比べると印象的です。またこの顔はB君に少し似ているようで、まだ体も思うように動かず、何ごともし遅れがちで表現も思うようにできないB君が、それでもいつしうけんめい競技をやっているとこのようにではほえましい感じます。まん中の

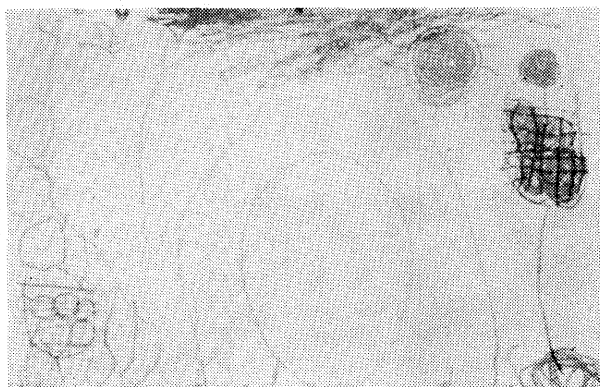
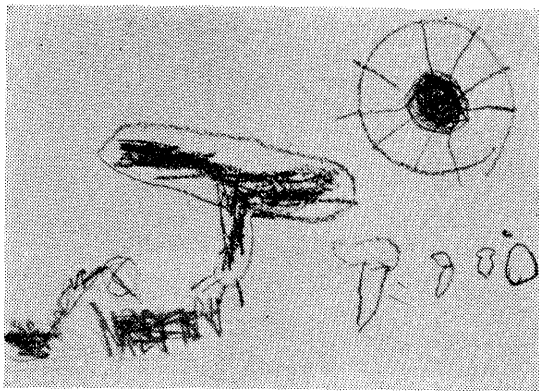


写真 (九)





二重丸はグランドをあらわしているようですが、赤と白とにわかれた外と内との対称的な世界をこの円で結んでいるようにも考えられますし、また見ようによっては二重丸のお家をしょってよろよろと歩いているかたつむりのようでもあり、やっと独立して一人歩きしだしたB君の姿のようです。

運動会にも参加して段々と皆と歩調が合

うようになってきたB君がその次に描いた絵は、自動車ときのこでした。左手に青く塗った自動車があつて、ライトが右側のきのこを大きく照らしています。きのこは一番左のものが大きくて、右に向かって順に小さくなっていますが、右上には黒い車輪のようなものが描かれています(写真参照)。

これはきのこを下から見上げたもののようでもあり、またB君は後で月の傍にあるねづみ色の太陽なども描いていますので、あるいは夜の太陽のようなものかもしれません。はじめは左ばかり照らしていた自動車のライトが夏休み前には左右を照らすようになり、ここでははっきり右に向いています。そしてその光りできのこを照らしだしているのはおもしろいと思います。きのこは大地からはい上がるように生えてきませんが、大地的なイメージを持つ母親像と関係の深いものであり、よく成長期の子どもの空想や、また何か問題を解決しようとしているおとなの夢にも出てくる主題です。

またきのこは宗教にも関係があつて、きのこの持つ毒性から何か神秘的な力を持つものとして昔から考えられてきたようです。キリストという言葉は、古代のヘブル語ではある種の毒きのこの名前であつたと主張する学者もいますし、またギリシャ神話によく出てくる神々の食物は、あるきのこから取れるものであるという説もあります。

きのこを主題にした民話もたくさんあり、絵本などでは森の中のかわいいお家であつたりして、無意識の暗い森の中の保護者でもあります。このようにきのこは神秘的な生命力をあらわすもののようです。

B君はこの頃から態度が静かになって、冬休み後はしばらくの間、今までなにかと手がかって先生の注意をひいていたB君が、先生にもいたのかいなかったのかかわからなくなる時もあったほど、まったく静かな時期を経て、一年の終りには爆発的に生命力を活動させて大きな成長を示すのですが、その頃の絵については、また次回に報告することにしたましよう。